

「100年の温かい心（エルトゥールル号の遭難）」

今日は二つのお話をします。この二つの話がどう関係するのかに気をつけて聞いてください。まず**一つ目の話**です。

今から120年くらい前、明治23年（1890年）、みなさんのおじいちゃんやおばあちゃん、曾おじいちゃんや曾おばあちゃんも生まれる前のお話です。約600人が乗るトルコという国のエルトゥールル号という船が、和歌山県の紀伊半島の南端で台風にあいました。船は、ものすごい波を受け、ついに沈んでしまいました。乗組員は、荒れ狂う真っ暗な海に投げ出されました。



翌朝、近くの島に助かった乗組員が流れ着きました。島の村人はみんな海岸へ救助に向かいました。村人たちとは、言葉はまったく通じません。しかし、しなければならぬことは、人の命を救うことです。海の水で体温を奪われ、手も足も氷のように冷たくなっている人がたくさんいました。意識も朦朧としてくエルトゥールル号> います。「早く、温めるんだ。」村の

男達は上半身裸になってトルコの人達を抱きかかえ、代わる代わる体温で温めながら救助しました。見ず知らずの外国人であろうと、彼らには何のためらいもありませんでした。その村は、当時は貧しく、食べ物もほとんどありません。でも、いざという時のために自分たちのために蓄えていたサツマイモやニワトリまで、全て持ち寄ってトルコの人達に食べさせたのです。そのかいあって、救助した69人全員の命を助けることができました。



二つ目の話です。今から25年くらい前、昭和60年（1985年）、現代です。イラン・イラク戦争が激しくなる中、突然、当時のイラクの大統領が、「イラン上空を飛ぶすべての航空機を、2日後から攻撃する」と発表しました。イランにいた日本人約500名は驚きました。少しでも早く外国に脱出する必要があります。しかし、日本の航空会社の飛行機はイランへ飛んでいません。日本人を優先して乗せてくれる飛行機は1機もありません。どこの国の飛行機も自分の国の人を助けるので精一杯です。攻撃まであと1日になりました。でも、ついに日本から救援機は間に合いませんでした。もうだめか。誰もがそう思いました。

その時です。ある国の飛行機2機が危険を冒してイランへ乗り入れてきたのです。そして空港で途方に暮れていた日本人全員を乗せて飛び立ってくれたのです。まさに間一髪でした。攻撃の1時間半前でした。ある国とは・・・そうです。トルコです。

なぜ、危険な場所へ、日本人のために、トルコは救援機を飛ばしたのでしょうか。その大きな理由は、約100年前のあの「エルトゥールル号の遭難」でした。トルコの人達は、日本人から受けた温かい心づかいを忘れることがありませんでした。歴史の教科書にも載せられ、トルコ人で知らない人は誰もいないほど重要な出来事として語り継がれてきたのです。

100年前の日本人たちの温かい心は、こうして100年も経った後でも生き続けました。

温かい心はすごいです。100年という時も越えます。

このお話は、トルコではとても有名なお話ですが、日本ではあまり知られていないので、校長先生はみなさんに是非このお話を知ってもらいたくて、お話ししました。

（外務省 HP を参考にしました）